

都道府県・指定都市番号	25	都道府県・指定都市名	滋賀県	研究課題番号・校種名	3 (5) 幼稚園・小学校
				領域名	校種間連携
研究課題	<b>学校全体で取り組む研究課題</b> (5) 校種間の連携による教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名  (園児・児童・生徒数)	し が だ い が く き ょ う い く が く ふ ぞ く よ う ち ゅ へ ん 滋賀大学教育 学部 附属 幼稚園 (129 人)		学校・地域の特色及び実態等 ・幼稚園，小学校，中学校が同一の敷地にあり，ほぼ全員が附属幼稚園から小学校，中学校に進学する。 ・昨年度から研究を重ね，幼稚園小学校お互いの教員同士の理解が進みつつある。		
所在地 (電話番号)	〒520-0817 滋賀県大津市昭和町 1 0 番 3 号 幼稚園 TEL 077-527-5257 FAX 077-527-5262 小学校 TEL 077-527-5251 FAX 077-527-5259				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	附属幼稚園 HP <a href="https://www.edu.shiga-u.ac.jp/fk">https://www.edu.shiga-u.ac.jp/fk</a> 附属小学校 HP <a href="https://www.edu.shiga-u.ac.jp/fs">https://www.edu.shiga-u.ac.jp/fs</a>				
研究のキーワード	教員の交流      子供の姿の記録      幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 円滑な接続      継続した評価				
研究結果のポイント	○推進委員が中心となり，共通の視点を基に参観や協議を重ねたことで，校種間の交流が活性化した。初年度の研究を土台にしたことで，他の教員についても相互理解が大きく進んだ。 ○学校園の特色を生かした評価・検証により，幼小の教員が子供の姿を基に協議することができ，幼小の教員が協働してスタートカリキュラムの作成・改善に取り組めた。 ○資質・能力に関連付けた記録用紙の活用や，校種をまたいだ抽出児の設定により，幼児期から児童期への学びのつながりや，円滑な接続を図る指導の工夫について，協議が深まった。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

幼児期から児童期への学びをつなぐ，カリキュラム開発  
 ～子供の育ちの姿を軸にした，円滑な接続を図る指導の工夫～

(2) 研究主題設定の理由

中央教育審議会答申(平成 28 年 12 月 21 日)で示されたように，学校段階等間の円滑な接続は，今日の学校教育における喫緊の課題である。中でも，幼児期の教育と小学校教育の接続について，幼児期の教育で身に付けたことを生かしながら児童期の学びにつなげる接続が強く求められている。生活科を中心としたスタートカリキュラムを小学校の教育課程に明確に位置付け，指導や環境構成等の工夫によって，幼児期に総合的に育まれた資質・能力を，各教科等の特質に応じた学びにつなげていく

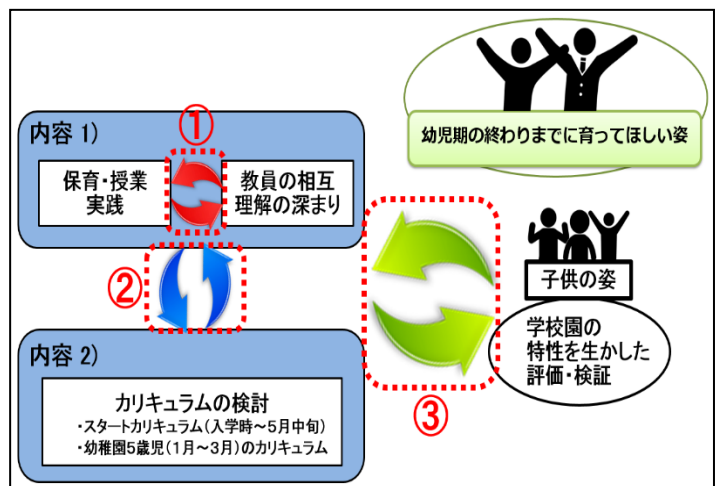


図 1. 研究のモデル

ことが求められている。このような考え方を各教員が共有し，実践していく必要がある。



## ②接続期のカリキュラムの作成・検証

幼児期の自発的な活動としての遊びを通して育まれたことが小学校の学習につながるように、幼児期から児童期へと学びがつながる接続を目指して、生活科を中心に授業を検討し、カリキュラムを作成した。研究内容①で生まれた教員の気づきをカリキュラムに反映させ、カリキュラムの検証を通して実践や相互理解を深めるなど、研究内容①と関連付けて改善を重ねている。…図1②

平成30年度については、作成した接続期のカリキュラムを実施し、再度検証を重ねた。小学校入学直後については、幼稚園の教員が授業や生活の様子を参観し、子供の姿を基に、カリキュラムや指導の工夫について、協議を重ねた。…図1③

### (2) 具体的な研究活動

#### ①保育・授業実践を通じた教員の相互理解の深まり

記録用紙を作成し、子供の姿を基に参観・協議した。記録用紙については、子供の姿を共通の視点から協議できるように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を資質・能力を読み取る視点として設定し、環境の構成や教師の援助についても記入できるようにした。さらに、抽出児を設定し、抽出児についてよく知る幼稚園教員を中心に、1年生前期(4月～7月)の様子を記録・分析することで、幼児期から児童期への学びのつながりを協議した。協議では、幼稚園と小学校に共通する部分、独自性といえる部分を探り、協議によって生まれた教員の気づきや学びを記録した。また、日常的な交流の他に、定期的に研究保育・研究授業を実施し、研究会を持つことで関係者の気づきを共有する場とした。

特に平成30年度については、個別の姿の分析だけではなく、幼児期の姿がどのように児童期の学びへとつながっていくのか、どのような指導によって円滑な接続を図るのか、協議した。

研究によって得た気づきから、実践の変容が見られた。以下に研究によって得た教員の気づきと、実践の変容を例示する。

- ・**気づき** 小学校の学習では、学級で同じ課題に向かって活動することで、学びの高まりを実現している取り組みの姿がある。

**実践の変容** 小学校での学び方を見通したことで、個々の興味は大切にしつつ、学級や小グループで共通のめあてを持って取り組む充実感や達成感を味わう経験が大切だと考えた。幼稚園でも日常の中や造形展等の行事で、自分たちでめあてを見付け、協力して取り組むことを意識して取り入れるようにしてきた。

- ・**気づき** 幼稚園を参観した経験から考えると、友達と思いを交わしながら主体的に活動する遊び中心の生活から学級での一斉指導が中心の学習になる学び方のギャップが大きい。幼児期から1年生前期には、つぶやくことで理解を深めたり、自分の気持ちを整えたりする姿が多く見られた。円滑な接続を図る指導の工夫として、学級全体の交流よりも隣席の子供との関わりが有効に働くと考える。

**実践の変容** 小学校の学習において、教員が少人数での活動を積極的に取り入れるようになった。また、交流の効果や必然性を意識し、より有効に仲間と交流できるように考えるようになった。抽出児の姿として、幼児期には周囲に向けて思いを表すことが難しかったA児についても、隣席の子供とのやり取りで弾みを付け、学級全体に向けて発信する姿が見られた。

- ・**気づき** 幼児期に経験してきているように、子供が「やろう」という気持ちを支えることが大切である。子供たちから思いを引き出しながら子供主導で進め、思いや願いを持って学習していけるようにする必要がある。そのためにも、安心して過ごせるように、教師の存在も含めて環境を整えたい。

**実践の変容** 生活科を中心に、子供の「やろう」という気持ちを引き出す支援を行った。例えば、「わたしたちがつくる『ようちえんミニミニうんどうかい』」の実践では、6年生が「ミニ運動会」に招待してくれた経験を基に、幼稚園の子供たちに楽しんでもらえるように運動会を開催する活動を設定した。6年生への憧れを基にしたり、仕事をグループで分担したりすることにより、子供たちが本気になって学びに向かう姿が見られた。

## ②接続期のカリキュラムの作成・検証

前項のような保育・授業実践から得た気づきを生かし、幼小の教員が協働して接続期のカリキュラムを作成・検討した。幼稚園の接続期カリキュラムでは、小学校での学習を見通して、「友達と共通のめあてをもって少人数のグループで取り組む姿」や、「仲間と自分の思いを出し合いながら、実現に向けて取り組む姿」を重視し、検証した。小学校のスタートカリキュラム（入学時から5月中旬）については、協議のプロセスが紙面上から読み取れるように、教員が気付いたことや具体的な意見などを補助的に記述した。作成したカリキュラムについては、平成30年度に実施し、参観した子供の姿を基に幼小の教員が継続的に協議し、新たに獲得した気づきや学びを追加した。また、保護者へのアンケートを実施し、小学校への進学に関する思いを調査した。この分析結果についても、カリキュラムに反映させた。

これらのカリキュラム検討を通して、幼小の教員が実践や相互理解を深めた。

## 3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 本学校園の教員が互いの保育・授業を参観して実践を共有し、日常的な交流や合同研究会を通して相互理解を深めた。平成30年度については、昨年度の研究を土台にしたことで、研究推進委員以外の教員についても相互理解が大きく進んだ。小学校へ入学しても幼児期に積み重ねてきたことがゼロになるわけではないことを確認し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や参観から読み取れた経験や力を生かすために、安心して過ごせるように配慮することが大切だと理解できた。小学校では、実践の交流や相互理解を効果的に推進するために、研究の中心となる教員が核となり、協議から生まれた気づきを紙面にまとめたり、参観時に参考になる情報を示したりした。この教員については、週に1時間以上の参観に継続して取り組んだ。
- 研究を通して得た気づきや学びが、実践の高まりにつながった。幼稚園では、学級や小グループで活動する機会を設けることで、仲間と共通のめあてに向かって取り組むよさを味わう姿が見られた。小学校では、教員が子供の幼児期の経験をふまえて指導したことで、経験を生かしたり、自信をもって活動したりする子供の姿が見られた。また、「わたしたちがつくる『ようちえんミニミニうんどうかい』」の実践のように、幼児期から6年生をつなぐ視点も生まれた。
- 子供の姿を資質・能力に関連付けて分析するための記録用紙を作成し、子供の姿の記録を蓄積した。また、本学校園の特色を生かした評価として、抽出児の姿を継続して記録したことで、幼児期から児童期への学びのつながりや、円滑な接続を図る指導の工夫、接続期のカリキュラムについて、より具体的に協議することができた。
- 幼稚園の公開研究会において、小学校の授業との同時公開やパネルディスカッションを通して、地域の教員に対して本研究を周知し、校種間の接続について考える機会を提供できた。
- 3つのサイクルを組み込んだ研究構造をデザインし、子供の学びのつながりを中心に据えて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして教員がつながったことなど、取組のプロセスを他校の参考になる形で示すことができた。
- 教員間の交流や相互理解が進んだが、特に小学校教員については、依然として理解度の差が大きい。今後も相互の参観や交流を続けることで、各校種における学び方や学びのつながりについて、理解を深めていきたい。
- 学びのつながりについての協議は、5歳児と1年生のつながりが中心になった。より大きく、3歳児から6年生までの教育課程をつなげるように、カリキュラムの改善を続けたい。

## 4 今後の取組

生活科の研究授業を通して、幼児期から6年生までをつなぐ指導の工夫を実施・協議したが、他教科への広がりには十分ではない。今後、幼児期の学びと各教科のつながりについても協議を続け、3歳児から6年生までの教育課程をつないでいきたい。また、研究の今後の展開として、本研究で得た考え方や取組みのプロセスを広く活用できるようにする必要がある。本学校園と実態が異なる場合についても、本研究をモデルとして研究成果が活用されるよう、研究を発展させていきたい。